

歴史資料室だより

①

南部氏館と近藤喜則史料室

「歴史資料室？ 聞いたことがないなあ…」、という方が多いと思います。ですので、まずは「自己紹介」から始めます。

歴史資料室は、平成28年4月、教育委員会の生涯学習課内に開設されました（当初の名称は歴史資料室準備室）。

当時、町には郷土の歴史を見つめ直すため、南部氏と明治時代の偉人近藤喜則に関する施設整備の構想が持ち上がっており、準備室



道の駅なんぶの騎馬像



文化館2階の史料室

は、その実現に向けての調査・研究とともに、展示方法や内容を検討することが目的でした。

調査・研究等は委嘱を受けた3人（途中から4人）の委員によって行われ、南部氏に関しては、平成30年7月、道の駅なんぶ内に「南部氏館（やかた）」がオープン。南部光行公の銅像をシンボルにするなか、訪れる人々に、南部氏の歴史と「奥州南部氏のルーツはここ南部町にあり」をアピールしています。

一方、近藤喜則については、翌31年3月、アルカディア文化館（図書館・美術館）2階に「近藤喜則史料室」を開設。明治維新前後の郷

土の様子とともに、同氏が携わった、教育、殖産、医

現在は古い文献を読み下し

両施設の開設の後、歴史資料室は、「専門部署として、町の歴史について調査・研究を重ね、きちんとした形で後世に残していこう」と新たなスタートを切り、主に文献史料に関する研究に軸足を移しました。

町内には、旧家を中心に江戸時代以降のさまざまな文献が残されており、当時の世相や人々の暮らしをうかがい知ることができます。ただ、古い言い回しや字体で書かれているため、広く

知ってもらうには、文章を解読し現代文に書き直さなければなりません。いわゆる「読み下し」といわれるもので、ここ5年はその作業をしています。

取り組んできたのは、近藤喜則に関する「二家小伝」をはじめ、江戸時代の「諸通行筆記」、江戸から明治にかけて「落穂拾遺1」「落穂拾遺2」で、本年度からは「御用日記」に取り

療の3つの大きな業績を紹介しています。

掛かっています。

このうち、「一家小伝」は、近藤喜則が自分の人生を振り返り、家族のことや青年期の旅行、自分が県の幹部として携わった各種施策、さらに中心となって立ち上げた会社「殖産社」の主にミツマタに関する事業について記しています。

「諸通行筆記」は、喜則の先祖に当たる近藤東左衛門が書いたもので、江戸時代、元幕府老中の安藤対馬守信成一行が、身延山参詣で南部本陣に宿泊した際の出来事が細かく記録されています。

「落穂拾遺」は南部の木内三朗の手によるもので、

江戸末期から大正にかけての地元の歴史や伝承が挿絵を交えて分かりやすく紹介されています。

また、「御用日記」は万沢の吉田家に伝わる、江戸時代の万沢御番所の公務に関する日誌で、維新前の約50年間の出来事が8冊にわたって記述されています。

この中で、「一家小伝」「諸通行筆記」「落穂拾遺1」については、すでに現代訳の冊子として製本されており、図書館で読むことができます。

「歴史資料室だより」では、こうした研究結果を、それぞれの時代背景やエピソードを交えて定期的に紹介していきます。このあとも、ぜひ、「ご覧ください」。

メンバー

歴史資料室の委員は5人で、現在は、そのうちの4人が主に活動しています。資料室があるのは、旧富河中学校の2階（今年4月に分庁舎から移転）で、委員は、旧南部町・富沢町の町史

をはじめ、多くの歴史史料に囲まれながら、毎週火曜、木曜の午前中を基本に、古い文献と向かい合っています。歴史資料室の委員は次の5人です。芦澤和彦、近藤正寛、佐野正剛、山本純司、渡辺拓雄